

とりとめない思い出



国分綾子

大正の終りから昭和の初期にかけてが私の

在学時代だったが、今顧みるとよき時代であったとの感懐が深い。しかし記憶がわるいのか、思い出は消えそうな心もとないものばかりで、その中で試験がすんだときの解放感などがいやにまざまざとあざやかに浮かんでくる。全く記憶とはヘンなもので、その、今は遠くおぼろになったちぎれちぎれの思い出の中で、二つ三つ自分でもおかしいほど心に残っていることがある。その一つは普通部とよんでいた女学校にはいった当座、私は隣りに並んだAさんという級友に、

「あんたどこ、お魚屋さんか？」と突然きかれたことがある。返事につまるは

どそれは真面目な問い方だった。

Aさんは町方の商家の娘さんだったらしく、東京から少し前に京都へ転居してきた私の、毎日のお弁当箱に魚っ気がはいつているの、毎日のお弁当箱に魚っ気がはいつているの、毎日のお弁当箱に魚っ気がはいつているのを聞くのだろうといぶかりながら、

「いいえ、魚屋なんかじゃないわ」とフン然として答えたことを思い出す。

この頃、京都の地方色のある家庭のおそろざいがだんだん姿を消して行くのを惜しいと思つて、いろいろな人に伺つて書きとめることをしているが、それでようやく思い当つたのが、幼ない日のあのAさんの質問であつた。

思うに、魚をたべる日は一日と十五日、そ

れもしんと茄子をたいたり、棒だらとエビ芋をたいたり、の京の家庭では、毎日生ぐさのはいっているお弁当を持ってくれば、魚屋の子？と思つたのであろう。食生活は今よりもずっと京都らしく、郷土色がゆたかであつたわけだ。

級友には、朝鮮、台湾からの留学生もかなりいたし、米人宣教師のバトレトさんのお嬢さんのアグネスさんという人もいてなかなか国際的だった。バトレトさんはやがて帰国されたが、その家が梨木通にあって、府一のそばから通つていた私は、学校の通りによく寄つて遊んだものだった。

梨木通というのは御所の東側の通りで、今出川から広小路の梨木神社の前までの間をいうのだが、ほんとうにしづかで、心に沁みるようないい通りだった。外人宣教師の、なつかしい開拓時代のような木造建て洋館のまわりの庭に、ぐみの木があつたり、土塀のすぐ内側に房を垂らしたように重く動かない八重桜が咲いていたり、私はその梨木通のしづかな午後を東京へ行つても長い間よく思い出した。

初夏から夏にかけて、梨木神社横の辺り、

道の真上までさしかわした木の枝が陽の光りをレースのように透かせて、白いブラウスまでみどり色にするようなあの気分も忘れられない。臉の道である。

そうして歩いて二十分余りで通学していたが、ある朝、それは冬だったと記憶するのだが、校舎が見える御所の道へ出て何の気なしに見上げると、いつもの煉瓦建ての校舎が見えない。はっとして目をこするようにして見直すと全館無残な黒焦げで、思わず夢中で走り出した。火事だったのである。昨夜のうちに内部をすっかり吹きぬいて焼いてしまったのだ。その朝、体操場で行なわれた礼拝の厳肅だったこと。松田道校長先生の声涙下る祈りにみんな涙がとまらなかつたことも覚えている。

普通部から家政科へ、それを通じて料理を習ったミス・デントンの思い出は、これまた、たぐり出せば限りがない。たくさんエピソードもある中に、料理のこと、家庭のしつけなどと、今いろいろな仕事の上で思い到るとき、あの先生から受けた教えは得難く、ありがたいものだったと思う。「この方法で」という彼女一流のやり方は、あくまで例外をゆ

るさず、そのままだれにもくり返させた。馬鈴薯の皮のむき方、芽のとり方、玉ねぎの黄色い芽の除き方、マヨネーズやホワイトソースの作り方、ボールの中身のとり出し方、きれいにさらえる方法など初歩から当時は「どうしてこうやかましいのだろう」とブツブツいったものだが、その主張にはやつぱり「これが最上のやり方だ」という自信があったのである。

教える側では長年やってきて、この方がよい。これが最上だということがはっきり擲めていっただけに、素人の人とか若い人にその方法を教えたことになる。いずれはその方法をとるのが一番よいということ悟るのだが、その回り道をさせまいとしてやかましく一つの型を押し出したのであろう。

そうした一つの型が体に沁み込んで、身につけてしまえば、ああその通りにしてよかった、とあとで感謝するようなことがあることを私達は幾つも知っている。ことに料理などには基本的なものを型通りにやって行く態度というものが必要である。しつけのことが近頃また新しい目で見られてきているが、私がいまになってミス・デントンの頑固なほどの

ひたむきな教え方についてはおえましく思い返すことができるのもそうした考え方かららしい。「お年齢ですよ」とあるいは言い返されるかもしれないが。

お年です、といえはこうして回想をかくようになったこと自身、すでに年齢であろう。女専では英文科のSさんと私が新聞学会の委員になって同志社新聞のお手伝いをさせて頂いた。すでに軍事教練反対などの気運が学内に高まってきて、刑事がそこに動きを見せていた時代である。大阪の新聞社へ校正に出かけたり、編集会議で教授や先輩の討論をきき入ったり、分らないことが多いながら好きな道で楽しかった。「新聞の気(け)」は、その時分からあったのネ」などといわれると、自分でもそうだったなあと思ふしきな気持ちで思い返したりしている。

いづれにしてもいい学校に学ばせて頂いたという感じは深い。古いかもしれぬ。お年齢かもしれぬ。しかしあの何ともいえない同志社の精神や雰囲気はどんなに学園がマンモスのようになっても置いておかきたいものである。

(同窓・夕刊京都報道部付部長)